

News and Reports



第 104 回ディケンズ・フェロウシップ国際大会

The 104th International Dickens Fellowship Conference in Eastbourne, UK
(21–26 July 2010)

宮丸 裕二

Report by Yuji MIYAMARU

本年度の大会は、英国南海岸に位置するイーストボーン（Eastbourne）にて開かれた。ホスト支部となるイーストボーン支部は、マギー・ドゥ・ヴォス（Maggie de Vos）氏をリーダーとして、連日にわたる大変興味深い内容のプログラムを用意して、歓待してくれた。

開催地であるイーストボーンは、栈橋が一本突き出る海岸に宿泊施設が並ぶ以外に特に観光の目玉もない

ような町で、若者や外国人も多いブライトンなどに比較してどこか寂寥感が漂う場所で、観光産業の再興に出遅れたような印象を残す場所であるが、その分、穏やかで落ち着いた印象を受けた。老人でも、老人でなくとも車や人の混雑を気にせず、安全に歩ける土地である。

当然ながら大学を持たない小規模の町であるので、会場に選ばれたのはイーストボーン駅から歩いて 10 分





ほどの海岸沿いにあるホテルであった。今回は当初の想定以上の人数の参加者があったため、チャッツワース (Chatsworth Hotel)、マンション (Mansion Hotel)、オールバニー (Albany Hotel) などの名前のついた複数のホテルに分けて宿泊をした。しかし、どれもライオン・ホテルという系列のホテルであるらしく、どこに割り当てられてもサービスは均等であり、どうやらホテルのスタッフもこの大会に割り当てられたメンバーが総勢で準備にあたっているようで、フェロウシップの移動と共にホテルのスタッフも移動していた。全体に、年次総会や講演などはマンションの地下の舞踏室 (ball room) で行われ、朝食と夕食、それに伴う催し物はチャッツワースの一階のダイニング・ルームで行われた。

到着した初日は夕食の後に、レセプション・パーティがあり、イーストボーン市のキャロライン・ヒープス市長 (Carolyn Heaps, the Lady Mayor of Eastbourne) が直々に、正装で現れて、挨拶のスピーチで歓待をした。大変ユーモアに溢れるスピ

ーチで、その正装にまつわる冗談で会場を沸かせた。市長も重々理解していた通りロンドンからこれほど近いながらもほとんどディケンズに縁やゆかりのないイーストボーンであるが、市長のユーモアとコスチュームは、ディケンズ・フェロウシップ国際大会の幕開けにこれ以上ないほど相応しいものであったと言えるだろう。

初日の晩に残念なことが二つあった。一つは、会長のグレイアム・スミス (Graham Smith) が電車の遅延でスピーチに間に合わなかったこと (ただし、翌日までには無事到着をした)。もう一つは、ここで伝えられたレイディ・エドナ・ヒーリー (Lady Edna Healey) の訃報である。財務大臣を務めたデニス・ヒーリー男爵の妻であり、ディケンズやバーデット・クーツに大変な関心を寄せていた。今回のフェロウシップにも参加の予定であったが、残念ながら叶わなかった。翌日の新聞も、その格や品性



ヒープス・イーストボーン市長



会場の一つとなったマンション・ホテル

を問わず、各社総じて訃報を伝えていた。

今回の大会では7つの講演を聞くことができ、全てマンション・ホテルの地階の舞踏室で行われた。講演者のラインナップは一頃と比較して随分大きく変わってきたという印象を受けた。

第3日目（7月23日）の一人目として、ジョン・ボウウェン教授（Professor John Bowen, of the University of York）が、タイトルをなんと訳するべきか「すだいのてすがく」とでもしておこうか、‘Philosophy of the Thubject’ という講演を行った。タイトルは勿論『ハード・タイムズ』のサーカス団長スリアリ（Sleary）の舌足らずのしゃべり方（実は舌が長いからそういうことになるのだと思われるが）、リスピング（lispng）を

模したもので、内容もまた、近代的思想に抵抗する者としてのスリアリに注目するというものである。グラッドグラインド（Gradgrind）やバウンダービー（Boulderby）が示す近代的知性、知識、思想、システム、意味体系といったものに対して、愚かでありとりとめもないながら簡素さを持つスリアリの言葉はまた別の性質による知性を体現していて、近代への批

判的要素を形成するべくディケンズはスリアリを登場させているのだというのが根幹の主張である。近代と前近代を対立させ、それも『ハード・



ジョン・ボウウェン教授

タイムズ』を取り上げては、従来言い尽くされている作品選択と論法だろうという批判は免れないと思うが、ボウエン教授が優れているのは、その言い尽くされたテーマと作品についてなお新鮮な引用を見つけて来ることである。既に納得していることをさらに説得される印象は拭えないものの、着実にして新鮮な根拠の提示と共に論を進めるところ、我々皆が真似るべき優等生の姿を示してくれている。そして、全日程の講演の中でも特にこれを面白く聞いたのは、何も最初の講演だからではなく、おそらくそうした見事な引用を立て続けに提示してくるからであつたろうと思う。

二人目として「ディケンズが言及していない法律家達」(‘The Lawyers not Mentioned by Dickens’)というタイトルで講演を行ったのは、マイケル・マッデン氏 (Michael Madden) で、この方はいわゆるディケンズでも文学研究者でもなく、法律家として、ロンドンを基点に日本も含む世界各国に展開するアシャースト (Ashurst) という法律事務所の経営者を務める人物である。本人も最初にはっきりと告白するところではディケンズ作品をとてども全ては読んでいないとのことで (ディケンズだからといって全て読んでいるわけでもないのだが)、どれを読んだか読んでいないかは訊かないことにしたいとのことであったが、ディケン



マイケル・マッデン氏

ズにはただならぬ感心を持っていて、その法律と歴史への知識の深さと併せ、多くの知識を与えてくれる講演であつた。国際大会では時々こうして法律家の方が講演を行うが、非常に得るところが大きい。言うまでもなく、法律にまつわる記述をこの時代の誰よりも多く小説に残しているディケンズのことだけあって、素材は無数にのぼるがそれを数点に整理して分かりやすくまとめてくれた。結論としては、ディケンズが批判する通りの法律や法律家の不備が目立った時代であつたが、これだけの時代の変化に適応しつつ法律の方も急速に時代に追いつくべく変わろうとしていた時代だったのだということであつた。同時に、マッデン氏の「自分は不道徳にも法律家を職業としており、厚顔無恥にも皆さんの前に出てきてしまいました。許して



ジャッキー・ブラットン教授

下さい」と西洋での悪徳業者としての法律家のステレオタイプを引き受けつつ、それをユーモラスに演じる態度は、日本の法律家にはなかなか見出しがたい姿勢であろう。

そして、この日の午前中の最後が、ジャッキー・ブラットン教授（Professor Jacky Bratton, of Royal Holloway, London）による大変力強い講演で、「舞台脚本家／舞台演出家としてのディケンズ」（‘Dickens as “Stage Writer / Director” ’）と題して、ディケンズ作品の舞台化にディケンズがどう関わっていったのかを論じた。大半は許可を取らずに海賊版として作成されたディケンズの舞台化作品を、ディケンズは快く思っておらず、しかし辞めさせる手段がないために不満をため込んでいたことは、良く知られている通りである。しかし、ブラットン教授は、メアリアン・

キーリー（Marian Keeley）という女優に注目し、ディケンズからの舞台化許可や、ディケンズとの協力関係から照射させるかたちで、いかにディケンズが本当は自分で舞台化を手がけたかったのかを詳らかにしていた。そして、ディケンズ晩年の小説作品はほとんどが舞台化を前提に執筆していたのだと、ブラットン教授は結論づけ、その辺りの信憑性の検討は、今後の大変面白い宿題となりそうだ。

第4日目（7月24日）は、年次総会があったので、その後の時間を使って、一本のみ、トニー・ポイントン教授（Professor Tony Pointon）の「ディケンズと借金」（‘Dickens and Debt’）という講演が行われた。ディケンズの作品の中に借金が出てくるケースを逐一拾って並べて行くもので、新たにディケンズの借金の描か



トニー・ポイントン教授



ジョウアン・アイゼル博士

れかたを確認したい人には便利だろうが、それ以上のことがあるわけでもないのが正直なところである。それでも残った興味深い点は、二点。一つは、ジョン・ディケンズ (John Dickens) が入獄中も給料をもらっていたという知識で、もう一つは問いかけだが、なぜピクウィック (Mr Pickwick) はマーシャルシー (the Marshalsea prison) ではなくフリート監獄 (the Fleet prison) に入ったのか。答えは皆さんにも是非考えて頂きたい。

第5日目(7月25日)には、ジョウアン・アイゼル博士 (Dr Joanne Eysell) の講演で始まった。アイゼル博士は長年の医療翻訳の業務からディケンズと医療の関係に興味を持つに至り、今回も、イギリスの近代化の中での医療や衛生について話をし

てくれた。「過去の身近なものの霊」(‘The Ghost of Familiar Things Past’) というタイトルは『荒涼館』の序文と『クリスマス・キャロル』の章題を組み合わせたものであるが、個々で言う「身近なもの」というのは、今日では身近になった医療や衛生といったことを指している。労働状況や食糧事情、衛生状態が激変し、平均寿命も疾病の治療も大きく変化を遂げた今日から見て、ヴィクトリア朝当時の状況を紹介してくれる内容で、大変興味深い知識を大いに与えてくれ、これに関しても、やはり他分野に従事しつつ話が上手な人の招聘ということがいかに重要であるかを感じた。

次に、トニー・ウィリアムズ博士 (Dr Tony Williams) が、「アーサー、



出番を待つ
トニー・ウィリアムズ博士



ジェニー・ハートリー教授

ブロック、ドルビー — ディケンズの公開朗読の事業管理」(‘Arthur, Block and Dolby: Managing Dickens’s Public Readings’) というタイトルで、公開朗読公演を行った際のマネージャー三人を詳細に追うかたちで話を進めていた。三人の事情もさることながら、あらためてディケンズのアマチュアとして公演に臨む態度が明確に立ち現れてきた点が、逆説的にも面白かった。

最後の講演が、ジェニー・ハートリー教授 (Professor Jenny Hartley) による「ユーレイニア・コテージの女性

達のその後」(‘What Happened to the Urania Cottage Women?’) であった。ディケンズの社会的業績の足跡の一つであるユーレイニア・コテージのことを調べてみても所詮分かっていることは限られているだけに、すでに分かっていることの紹介を反復するに留まってしまうのではないかというのは、こちら側の想像力に欠ける期待であって、それを見事に裏切って、ハートリー教授は、コテージにいた女性達の手紙を調べ上げ、その女性達のその後の経歴を分かっている限りで全て調べ上げ、その子孫を訪ねて直接に話を聞き集め、女性達が暮らした場所、働いた工場、残した工芸品を特定し、また移民した女性を追いかけてオーストラリアの移住先を突き止め、子孫の写真までもを集めていた。そうして、ディケンズ本人でも知り得なかった、できることなら是非知りたがったであら



AGM にて声が聞こえないと言われて、自分は十分に大きな声で話していると反論する議長のマイケル・ロジャーズ氏

うところを、丹念に調べ上げていた。その精力的な姿勢には舌を巻くが、研究というのは本来こういうことだろうと、思い起こさせてくれる意味で大変意義深い講演で、今回の中でも私が最高点をつけたいの実はハートリー教授だった。

年次総会（AGM）は、第4日目（7月24日）に開催された。総会はずつがなく進んだが、中でも今後の動きとして重要なのはディケンズ・ハウスの増築と『ディケンジアン』誌のデジタル化である。ディケンズ・ハウスは、ディケンズの家（48 Doughty Street）の隣に従来より購入してあった物件（49 Doughty Street）を増改築により連結させて、ザ・チャールズ・ディケンズ・ミュージアム（The Charles Dickens Museum）と名を改めて再オープンし、大々的に来訪者を呼び込む戦略に出る。後日訪れてみたところ、なお工事中であるものの、既に内部のカフェスペースが営業を始めるなど、徐々に変化が見られ始めていた。また、映画の撮影にマット・デイモン（Matt Damon）が訪れたそうで、ディケンズが関連する映画の公開が控えていることも伝えられた（なお映画のストーリーも、ディケンズがどう関わるのかも説明してくれたが、本当は内緒だそうなので伏せさせて頂くが、是非劇場に足を運んで確認して頂きたい）。また本年はミュージカル『オリバー!』の上演 50

周年にあたるため、『オリバー!』展を今夏は開催していた。一方、『ディケンジアン』誌はデジタル化して有料でオンライン配信を行い、今後の学術資産として積極的に利用されるように促していくことを発表した。研究者や大学院生をはじめとする未来の利用者からは価格面を含む提供のあり方についての要望を是非とも実施前に聞かせて頂きたいと編集長のアンドリュース名誉教授（Emeritus Professor Malcolm Andrews）より告知があった。

今回のエンターテインメントの目玉は、第2日目（7月22日）に訪れたディケンズ・ワールドだったのだろう、と思う。恐らく、私もバスに乗って同行した。ドーム状の会場の中には、ヴィクトリア朝の暗い町並みが再現されており、いわゆる遊園地にありがちなエンターテインメントの数々が用意されているが、その規模は勿論小さい。寸劇が加わる点は他の遊園地スポットと少し違っているか。いわゆるライドは一つだけあるが（その名も Great Expectations）、これに乗ってサブライズを大いに満喫できる日本人は今日では世代を問わずそう多くはいないのではないだろうか。そうした規模のものである。しかし、それは日本人だけではなかったようで、見ているとあちらの老人も余裕の顔で悠々と出口から出てくるのだった。この



ディケンズ・ワールドが楽しくて
楽しくてたまらない新井潤美氏

ライド、『大いなる遺産』の冒頭に出る湿地が登場し、墓地に多くの墓がある中、その一つに‘In the Memory of Andrew Sanders’とある。誰がやった冗談か分からないけれど、これを見つけた人が他にもいたから、ディズニーランドのミッキー探しほどの興味としては成り立っているのかも知れない。場所全体が



ディケンズ・ワールド内で上演されている寸劇。なんと15分かけずに『二都物語』を鑑賞することができてしまう。二時間後に食堂でビールを注文すると、期せずしてルーシーが運んで来てくれた。

そうした規模のものであるから、半日あればほぼ全て回ることができてしまうので、私も一つを残して全て回った。そしてその一つ残したのは、他の人々によれば「ディケンズ・ワールドでは是非体験すべき唯一のもの」なのだそうで、見事にその唯一のものだけを逸するかたちでバスに乗り込むのだった。その唯一体験すべきものは、三次元の何かなのだが、これから行かれる方は是非最初にこれに向かわれることをお勧めしたい。そして、決して見過ごせないのはお土産コーナーである。ほとんどの商品は他の数ある歴史的な博物館の類を訪れたら売っているのと同じものであり、オリジナル商品は鉛筆を始めとして2、3種類に限られて



ディケンズ・ワールドで販売されている犬とクマのぬいぐるみ。欧州の北辺にてなぜかお隣中国を連想する

いて、これを見つけ出すのは一苦労なので、ちょっとレアである。また、大量に入荷しているブルズ・アイ（『オリヴァ・トウィスト』に登場する犬）のぬいぐるみに至っては、それと同じ犬種の似た風合いを持つ犬のぬいぐるみで代用をしてあり、一箇所もブルズ・アイを感じさせない微妙な造りになっている。それと混ざるかたちで売っているのがテディベアっぽいながらもテディベアではないクマのぬいぐるみであるが、これについてはディケンズのどこを参照した製品であるのか、残念ながら特定することができなかった。さて、私が次回英国を訪れる時期はまだ未定であるが、それがいつであろうと、その時にまだディケンズ・ワールドが存在しているかどうか、少なくともそ

れを直接見てきた私からすると断言することはできないのが実情である。ご興味をお持ちの方はその意味からも是非一刻も早く訪れることをお勧めする。

ディケンズ・ワールドからの帰りにギャズ・ヒル邸の訪問が組み込まれていた。前回訪れた時以来随分と改築が進んでおり、地元の学校の一組織としての機能をすでに担っていた。

また、他の遠出のコースとして、第3日目（7月23日）にはペヴンシー他の南岸歴史ツアーと、第4日目（7月24日）にブライトン見学が組まれていた。

開催地がディケンズと何の関係もないためにより力を入れたのか、今回の国際大会のエンターテインメントは他の大会にも増して充実していたように感じられる。少なくともいつもよりも一層盛り上がったと言って間違いはないだろう。第2日目（7月22日）の晩は、ジェラルド・ディ



ブライトンの王宮にて
入場の列に並ぶ渡部智也氏



いつもながらの名演技を披露する
ジェラルド・ディケンズ氏

ケンズ（Gerald Dickens）とリズ・ヘイズ（Liz Hayes）がディケンズからの抜粋による朗読を行った。朗読といっても演技というのに近く、客席を立ち回りつつ、大変な熱演を見せてくれた。

第3日目（7月23日）の晩は「ヴィクトリアン・スライド・ショー」という催し物があった。意外な人気で会場を急遽チャッツワース・ホテルからオールバニー・ホテルに変更したものの、会場に集まった人々にもなかなかこのタイトルだけで内容を想像できていたとは言い難いだろう。これは、ヴィクトリア朝時代における最先端技術を用いたスライド絵画

の映写なのだが、その特徴は一枚一枚の絵画が手動で動くことである。仕掛けとしては今日からするとどうということはない、動く絵本のようなものを映写式にしてあるだけであるが、当時としては実に精巧に一枚一枚が手作りで作られている。そして何よりも素晴らしいのはこのスライドの見せ方であって、ナレーションを添えて、スライドの順序を工夫して見せ、時に、聴衆を驚かせ、時に聴衆と一緒に歌わせることで、会場全体が大変な盛り上がりを見せるのである。これを映写する機械は限られているので、今日では映写されるのを見ることはかなり貴重な機会なのであるということだった。



スライド・ショーにて
用いられていた機材

そして、今回、メインの大晩餐会では最終日の晩ではなく、第4日目（7月24日）に開かれた。ハープとフルートの生演奏を聴きながら行われた。



大晩餐会

今大会は通常と進行が違う面も多く、例えば乾杯の方法などが随分と変わっていた。それでも、昨年は大著作を出版しながらも訳あって今大会で講演を行うことが実現しなかったマ

イケル・スレイター名誉教授 (Emeritus Professor Michael Slater) も駆けつけて、いつもと変わらぬ大変魅力的な乾杯を行った。



芸人も登場して大いに盛り上げた

大晩餐会は前倒しになるものの、最後の晩 (7月25日) にも出し物が用意されていた。プロの芸人がパーリー・キングの装いで現れて、歌と余興で楽しませ、やがて、その指揮に導かれて、一同馴染みの曲を大合唱した。また、フェロウシップのメンバーによる出し物もいくつか用意されており、こちらも大変楽しませて頂いた。楽しみどころか、驚きに至ったのは、二人羽織を熱演する中でアンドリュース教授が見せたひょうきんな横顔であり、これはそうそう見られないちょっとした見ものであった。

余興にて珍しくはしゃぐ
アンドリュース教授

配布されたリーフレットによると今回は146名の参加で、うち日本支



晩餐会に限らず食堂では毎食
このくらいの料理を振る舞ってくれる

部からの参加者は三名で、私の他に新井潤美氏と渡部智也氏、そして、支部会員では（まだ）ないが日本人の方としては、瀬戸崎康子氏の参加があった。今回は、予想外に参加希望者が増えたため、また場所がイーストボーンとあって部屋の追加や開催規模の拡大は容易でなく、残念ながら多くの希望者を断らねばならないとのことだった。それだけに早くから予約した熱烈な会員が世界中から集まって、その場を盛り上げた。

一方、年々混み合っている印象を受けるので、無論開催地やその年その年によるだろうが、次回以降、参加をご希望の方は是非早めの予約をお勧めしたい。私自身は、2000年度（ロチェスター）、2002年度（ロンドン）、2006年度（アムステルダム）に続いて、今回が4度目の参加になるが、日

本全国の教育機関の暦が厳しくなっているせいもあってか、一時期は15人ほどにも上った日本人の参加が減っていることが気になっている。

参加できなかった方々のためにもう一言加えるとしたら、大会の食事を提供したチャッツワース・ホテルのレストランはこの国にありながら信じがたいほどに絶品の食事とサービスを提供する。かの地への用事も観光も普通の人はあまりないだろうが、今後何用かでイーストボーンを訪れるか、近くへ寄る方は、このレストランだけを目的に立ち寄るだけでも充分に価値があることをお伝えしておきたい。

私を含む日本の方々が食事の席に着くと、話題提供という目的も半分はあるのだろうが、2、3度に1度は隣の人が持ち出す話題が、日本での国際大会開催可能性についてである。かつては「日本には多くのディケンズファンがいるけれど、ディケンズゆ



かりの史跡や見物場所はないから」というのがこれまで私がしてきた応答である。しかし、それも、アムステルダム同様、今回もイーストボーンというディケンズと一切関係ない土地での開催であるだけに、この釈明は全く意味をなさない。また、大学とその寮を利用した大会は日本の事情からすると難しいが、今回や他の大会を見れば必ずしも大学が会場ではないと開けない話でもない。このように、即座に開けない言い訳には窮したものの、これだけの開催を望む声があることは実に悪いことではない。交通や開催会場を考えると東京で開きたいという説と、見物を兼ねるなら京都が良いだろうという説とが飛び交い、ある程度の具体的な議論に発展している。日本の事情からすると手を貸してくれる人が動ける地域ということも含めてまた別



の議論が必要になるだろうが、そろそろ放っておけないくらいに世界からの期待が高まっていることもどうやら事実であるらしい。それを迎える時の体勢のイメージをそろそろ具体的に持ち始める必要を感じるが、それをいつか実現し成功させるためにもまずは毎回の各地での国際大会への日本からの参加者がまた増えていくことを期待したい。

